

雲崗石窟をアジア文明の結晶物と評価した男
—木下杢太郎『大同石佛寺』に関する考察—

北京語言大学 周閱

東洋文庫

2026. 2. 26

構成

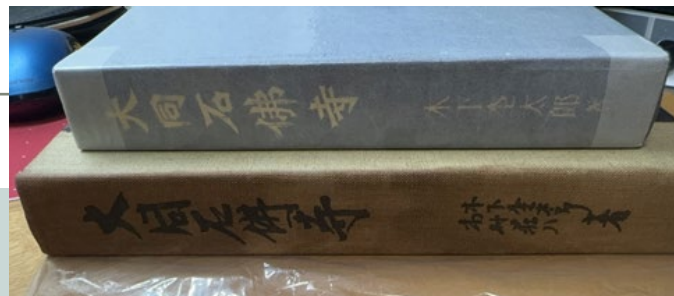
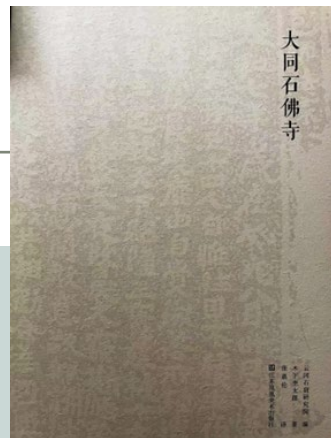
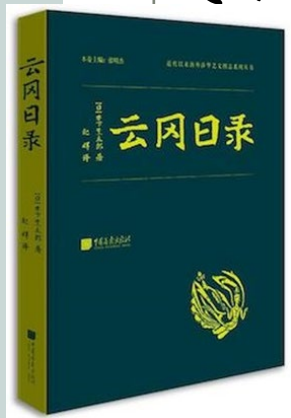
- 一 木下杢太郎の生い立ちと時代背景
 - 世界考古学の東アジアへの重心移動と日本の役割
- 二 雲岡石窟に関する考古活動の系譜
- 三 木下杢太郎『大同石佛寺』の構成と特質
- 四 終わりに—岡倉天心との関連



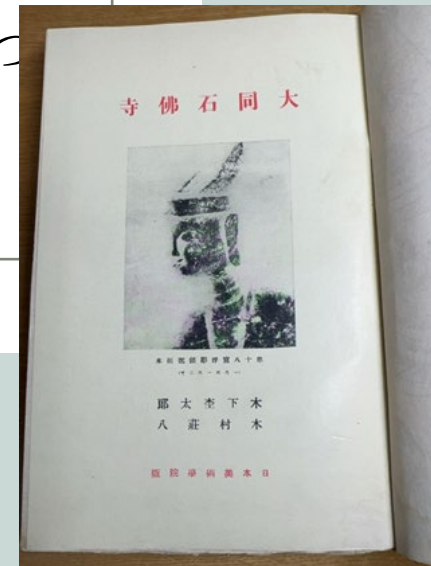
一、木下杢太郎の生い立ちと時代背景 —世界考古学の東アジアへの重心移動と日本の役割

木下杢太郎は、東京帝国大学医学部の教授、画家、詩人、劇作家、翻訳家、美術史家、キリシタン研究家

1920年9月10-16日山西省大同の雲崗石窟を詳細に実地調査した。その記録と研究、特に『大同石佛寺』は、後の日本や中国における雲崗石窟研究において重要な意義を持っている。



『大同石佛寺』
1922年版の扉



一、木下杢太郎の生い立ちと時代背景

——世界考古学の東アジアへの重心移動と日本の役割



• 世界的背景

19世紀末から考古学の関心地域が東洋へと移行

19世紀末から20世紀初頭，「辺境探検」

- ロシア帝国のプルジェヴァリスキー，中国西部を4回探検
- スウェーデンのスヴェン・ヘディン，中国新疆とチベット5回探検
- コズロフの探検隊，アルシャー砂漠でカラ・ホト都市遺跡を発見
- オルデンブルク，2回中国新疆と敦煌を調査



プルジェヴァリスキー



スヴェン・ヘディン



一、木下杢太郎の生い立ちと時代背景

——世界考古学の東アジアへの重心移動と日本の役割



● 日本の情勢

- 「東アジア探検考古活動の多くが欧米学者の主導で行われていることや、中国学者の関与がほとんどなく、日本学者の貢献もごく稀である状況」に対し、「とても遺憾であると感じる」 ➡ 考古探検、考察旅行
- 「日本の風潮が西洋化から東洋主義に転換したことについて、学術的な解釈と表現が急務である」（桑兵）

一、木下杢太郎の生い立ちと時代背景 —世界考古学の東アジアへの重心移動と日本の役割



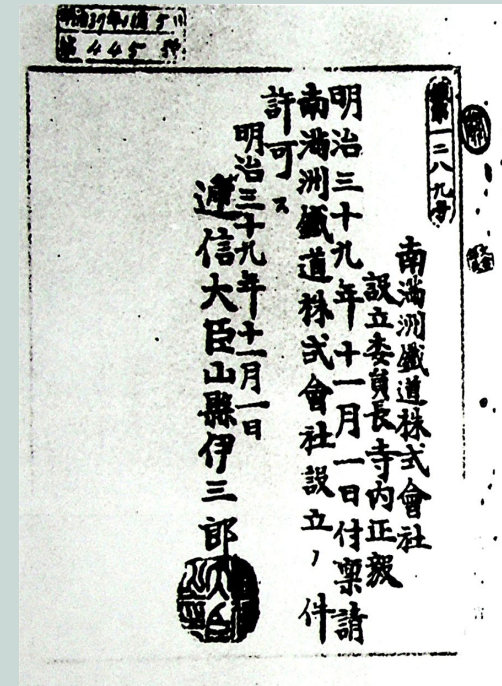
内藤湖南



- 世界的背景 考古学の主な対象地域が東洋へ移行
- 日本的情勢 東洋主義の日本復活 + 対外拡張政策

→→中国における現地調査

- 20世紀初頭の30年間に繁盛期，戦争期に頂点
- 政府の支援 岡倉天心—文部省；内藤湖南—外務省
- 調査機関 1900年東亜同文書院
1907年東洋協会学術調査部
1907年大連で「満鉄」調査部（1908年調査課に変更）
1908年満鮮歴史地理調査部 1921年「満州考古学会」
1925年「東亜考古学会」



日本政府
「満鉄」批准書

一、木下杢太郎の生い立ちと時代背景 ——世界考古学の東アジアへの重心移動と日本の役割

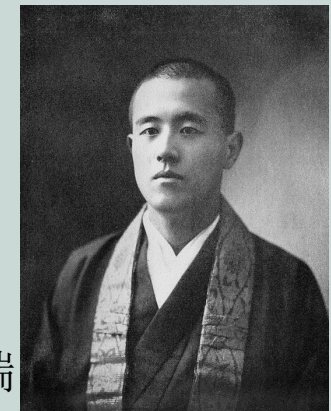


● 注目すべき三点

➤ 第1に，雲崗石窟を調査しようとした出発点

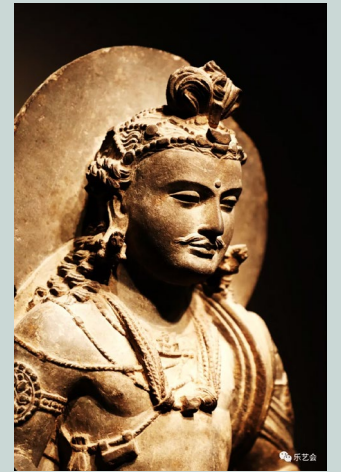
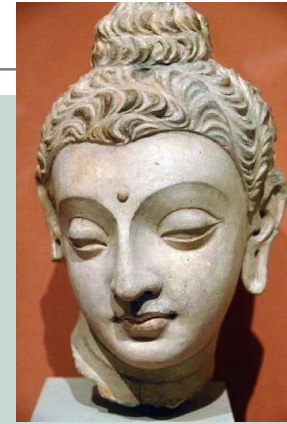
「支那では是等の彫刻像は清朝にしばしば重修せられて居りますが，今日に至るまでも尚之を優秀な美術品，文明史上の貴重な資料といふ立場から眞に愛惜して居るやうにも見えません。」

➡➡ 雲崗石窟を人類文明史上で評価され，全世界の芸術遺産として認知されることを望む



大谷光瑞

一、木下杢太郎の生い立ちと時代背景 ——世界考古学の東アジアへの重心移動と日本の役割



● 注目すべき三点

- 第1に、雲崗石窟を調査しようとした出発点
- 第2に、調査後に導いた結論は、前人のものとは異なる伊東忠太, 大同美術は希臘印度系のガンダーラ芸術
木下, 「本来雲崗の美術は特殊のものです。

……印度の原型に比しては著しく支那化作用を受けて居ます」

「それで印度藍本が國土の變つた大同に持ち來されて、其地に昔から存した藝術様式と混淆して、ここに始めて生じた支那化の新鮮味が藝術的に我々を異常に刺戟するのです」 → → 雲崗芸術がガンダーラ美術と同一のものではなく、中国本土の要素を集結したまったく新しい芸術。

一、木下杢太郎の生い立ちと時代背景

——世界考古学の東アジアへの重心移動と日本の役割



拓跋

● 注目すべき三点

➤ 第1に、雲崗石窟を調査しようとした出発点

➤ 第2に、調査後に導いた結論は、前人のものとは異なる

松本文三郎『支那佛教遺物』：完全にインドのグプタ朝から来たもの

大村西崖：インド的でも中国的でもなく、拓跋民族の独創

木下：「漢人が造つたか、北魏人が造つたか、さう云ふことは我々には分り兼ねます。唯廣義でそれが支那化せられたものであると考へるだけで満足しなければなりません」「然し夥多の工人の大多数は支那人（拓跋族、漢民族の區別は姑く問はず）であつたに相違ありませんから、印度的原始の典型が多大の支那化を受けたのは自然のことです。それらの事は雲崗の實物に就ても證明し得るやうに思ひます」

一、木下杢太郎の生い立ちと時代背景

——世界考古学の東アジアへの重心移動と日本の役割



● 注目すべき三点

➤ 第1に、雲崗石窟を調査しようとした出発点

➤ 第2に、調査後に導いた結論は、前人のものとは異なる

木下、「漢人が造つたか、北魏人が造つたか、さう云ふことは我々には分り兼ねます。唯廣義でそれが支那化せられたものであると考へるだけで満足しなければなりません」「然し夥多の工人の大多数は支那人（拓跋族、漢民族の區別は姑く問はず）であつたに相違ありませんから、印度的原始の典型が多大の支那化を受けたのは自然のことです。それらの事は雲崗の實物に就ても證明し得るやうに思ひます」

「成程随分支那化（漢化の意味ではなく）したものです。」

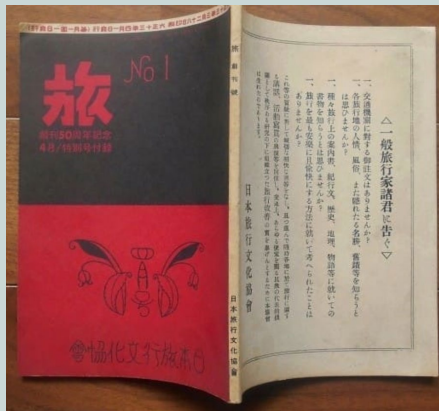
一、木下杢太郎の生い立ちと時代背景 ——世界考古学の東アジアへの重心移動と日本の役割



● 注目すべき三点

- 第1に，雲崗石窟を調査しようとした出発点
 - 第2に，調査後に導いた結論は，前人のものとは異なる
 - 第3に，更なる調査を断念した
- 1924年日本旅行文化協会『旅』，「朝鮮へ！/満州へ！/支那へ！」

『旅』創刊号



一、木下杢太郎の生い立ちと時代背景

——世界考古学の東アジアへの重心移動と日本の役割



和辻哲郎

● 注目すべき三点

- 第1に、雲崗石窟を調査しようとした出発点
- 第2に、調査後に導いた結論は、前人のものとは異なる
- 第3に、更なる調査を断念した

木下、「日本を離れて一人で内省的な生活を送っている」

→→ 「異域」の視点から日本を観察

「満州通信」：「他国の主権内に侵入し来つて植民をする」「古今未曾有の事実」

1916年12月23日和辻哲郎宛：「他国の主権」を侵して「植民」を進め
「大事実」「その現実を直視できない」

→→ 時局に対する冷静な認識，戸惑いから脱却しがたい葛藤

木下杢太郎の雲崗石窟の調査は、出発点から記述立場、考察論結、そして最終的な放棄まで、同時代の他の踏査者や中国紀行の執筆者とは必ずしも同じではなかった。さらに、これらの違いは、実際には近代日本における複雑な中国認識と日本認識の反映であると言えるのである。



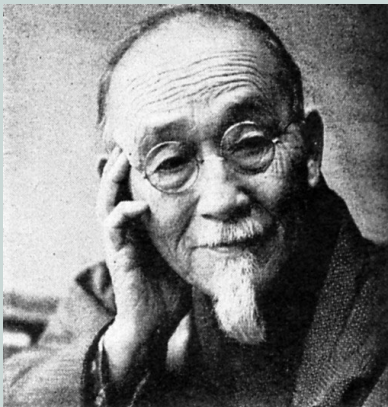
二 雲崗石窟に関する考古活動の系譜



二 雲崗石窟に関する考古活動の系譜

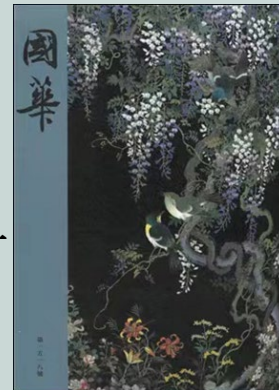


- 1902年伊東忠太が日本人による雲崗石窟調査の歴史を切り開いた。
- 1906年『建築雑誌』に「雲崗旅行記」
『国華』に「支那山西雲崗石窟寺」

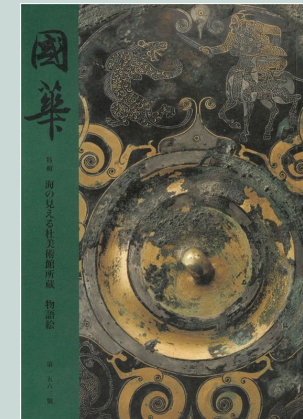


伊東忠太

『国華』第1518号
(2022.4)



『国華』
創刊号

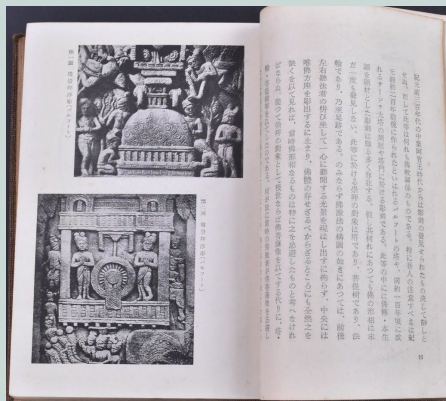


『国華』第1566号
(2026.4)

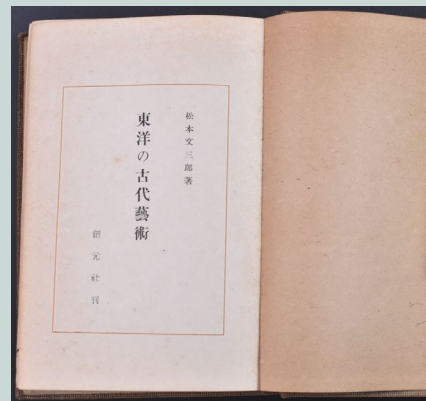
二 雲崗石窟に関する考古活動の系譜



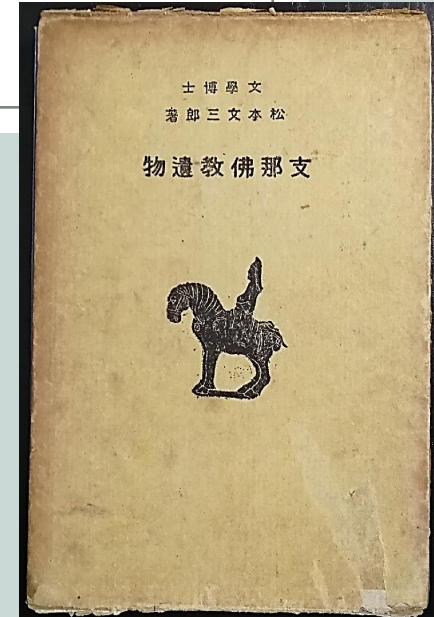
- 1902年伊東忠太が雲崗石窟調査の歴史を切り開いた。
- 美術史学者・大村西崖
仏教学者・松本文三郎



松本文三郎
『東洋の古代芸術』



中国考察途中の
大村西崖



二 雲崗石窟に関する考古活動の系譜



- 1902年伊東忠太が雲崗石窟調査の歴史を切り開いた。
- 美術史学者大村西崖
仏教学者の松本文三郎
- 中国

1918年に陳垣「記大同武州山石窟寺」，「辺境の地であり，交通の便が悪いため，旅行好きの人々もその奇観を探ることはほとんどなかった」

記大同武州山石窟寺 錄求方雜誌第十六卷第二第三號
衆議院議員陳垣

距京綏路大同站西二十里。左雲縣雲岡堡有石窟寺。為拓拔氏遺構。蓋千四百七十年於茲矣。以比伊闕石窟。尚早五十年。鑿山為巖。因巖鑄佛。巖高者二百餘尺。可受三千許人。佛高者六七十尺。雕飾奇偉。冠於一世。山堂水殿。煙寺相望。水經注所稱賞也。櫛比相連。三十餘里。續高僧傳所誇許也。徒以遠處塞外。交通不便。故好遊之士。鮮探其奇。迄今京綏路通。旦夕可至。同人乃以戊午重九前三日。約

二 雲崗石窟に関する考古活動の系譜



- 木下杢太郎, 単なる旅行好きではなく, 偶然の発見でもない, 出発前に入手困難であった文献を入念に収集していた。

伊東の旅行記

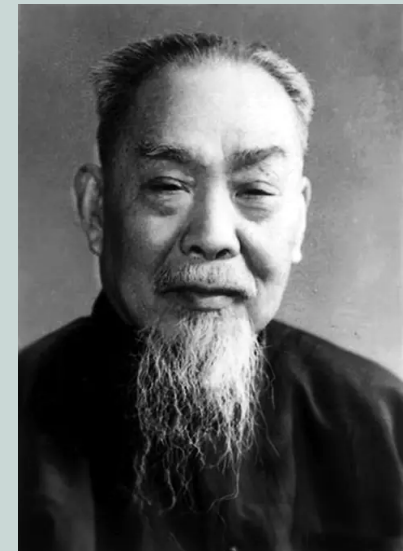
松本の『支那佛教遺物』

シヤヴンヌの『北中国考古図録』

大村西崖両氏の圖譜

陳垣の考證

→ → 学術的な考察

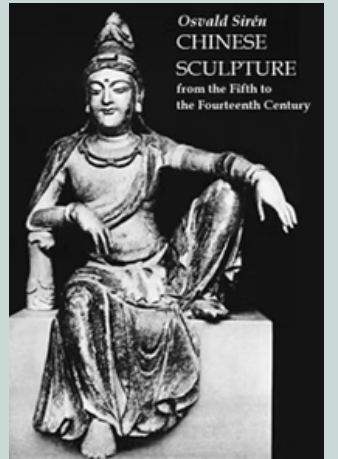
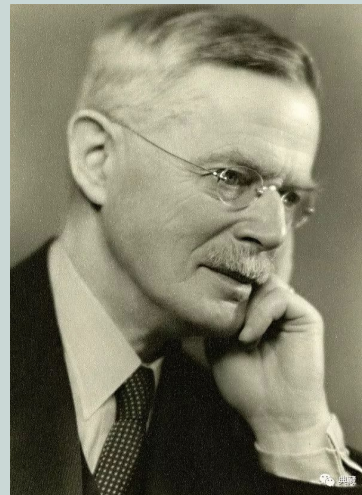


陳垣

二 雲崗石窟に関する考古活動の系譜



- スウェーデンの学者シレン (Osvald Sirén)
『五世紀から十四世紀かけての中国彫刻』 (四卷)



二 雲崗石窟に関する考古活動の系譜



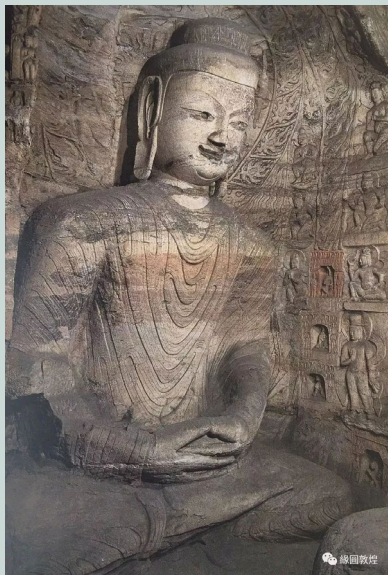
偏袒右肩式



- スウェーデンの学者シレン (Osvald Sirén)
『五世紀から十四世紀かけての中国彫刻』 (四卷)



通肩式



褒衣博帶



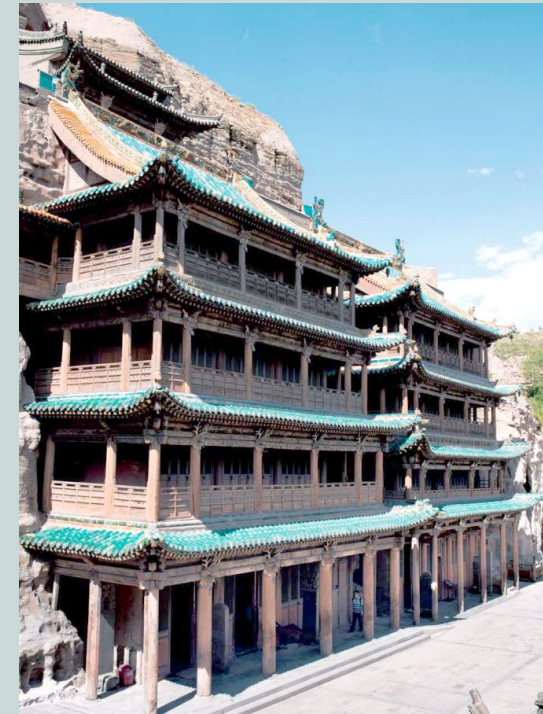
二 雲崗石窟に関する考古活動の系譜



- シレン 『五世紀から十四世紀かけての中国彫刻』
- 1938～1944年、京大東方文化研究所調査隊（水野清一・長廣敏雄）による雲崗石窟調査（計7回・延べ200日超）

1950年代『雲崗石窟：西暦五世紀における仏教寺院の考古学的調査報告』刊行（全16巻32冊）

民国二十七年（1938），晋北自治政府民生庁『大同雲崗石窟寺古跡詳誌』、「雲崗石窟に関しては，日本人の研究は甚だ詳しく，著書も甚だ多い」。



第六窟外景

『大同石佛寺』は，日本における雲崗石窟研究のみならず，世界的な雲崗石窟研究においても，新たな発展の端緒を開く架け橋の役割を果たしている。



三、木下杢太郎『大同石佛寺』の構成と特質





三、木下杳太郎『大同石佛寺』の構成と特質

「…少くともこの顔面だけは、一の驚異であると断言して憚らないのであります。それから朝暮の陽光と空気遠近法と視点の移動とに随つて、常に其外観を變じます。(中略)跪いて禮拜する心持より他の心持では、わたくしはこの佛像を仰視することができませんでした。」

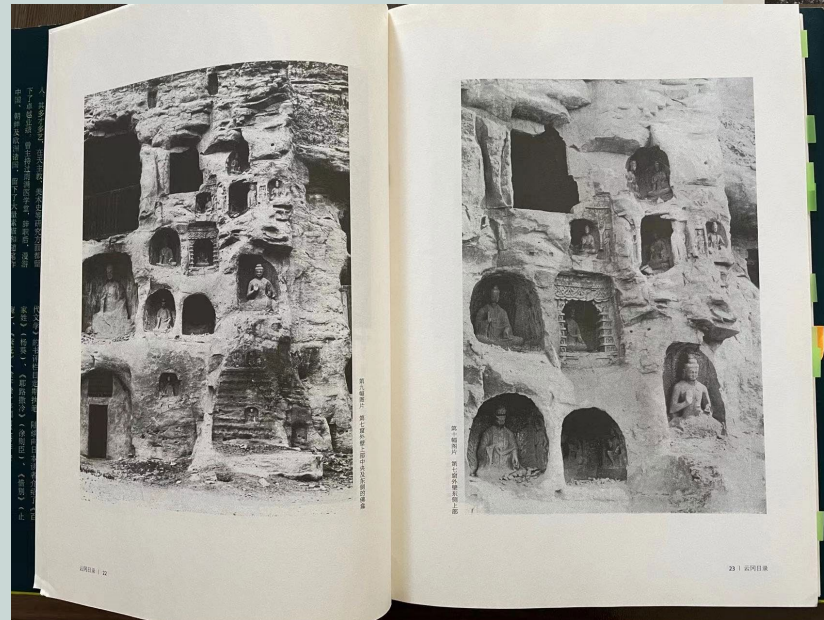
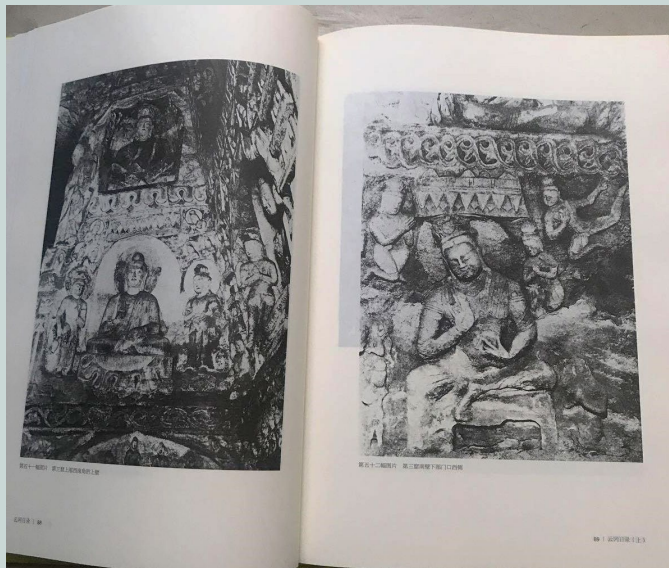
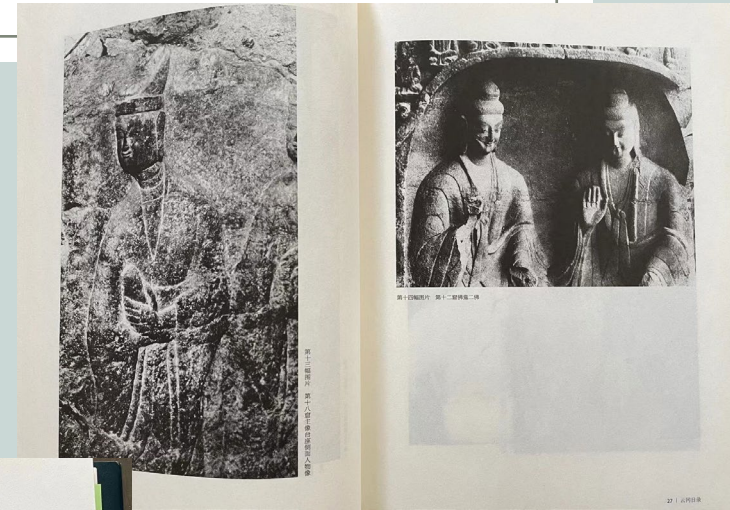
—木下杳太郎『大同石佛寺』（1920年、雲崗石窟第九窟）



三、木下杢太郎『大同石佛寺』の構成と特質



- 1920年 9月10-16日，雲崗石窟の石仏を調査
- 1922年，『大同石佛寺』出版



三、木下杢太郎『大同石佛寺』の構成と特質



• 図文併存

写真家・山本讃七郎撮影の石仏寺写真30点



第三十四幅照片 第二窟第三樓菩薩像（西面）假面剥離之石

「暗闇の室内では無論今日午後見た諸石窟の印象を反芻したのでした。跪きたくなるほどの愛慕と、なぐり附けたくなるほどの憤怒との交錯です。前者は古代藝術の不朽の美から受けた刺戟で、後者はその最近の劣悪なる修覆に對する反感です。」

第二窟
泥塗りの仮面を
剥ぎ取った後

13洞本尊的右手
(後世に泥で覆われた)

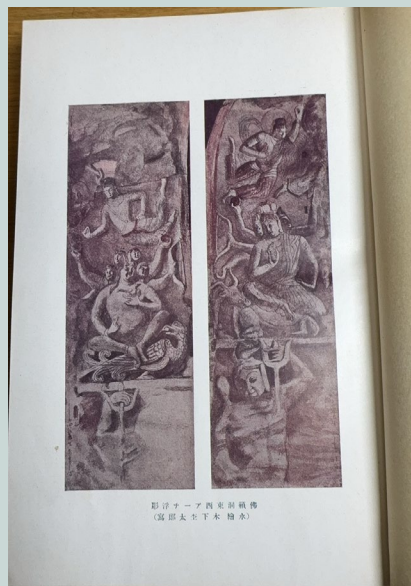


三、木下柰太郎『大同石佛寺』の構成と特質



歩測による平面図 →

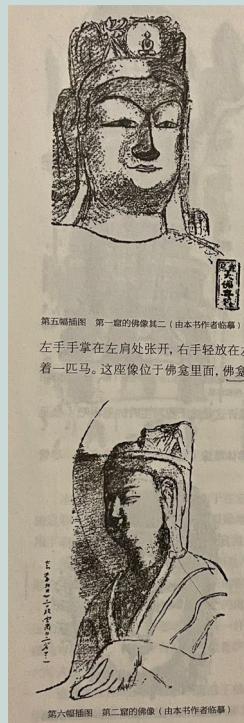
- 写真家・山本讚七郎撮影の石仏寺写真30点
- 肉筆ののスケッチ、平面図



木下柰太郎の水彩画挿図

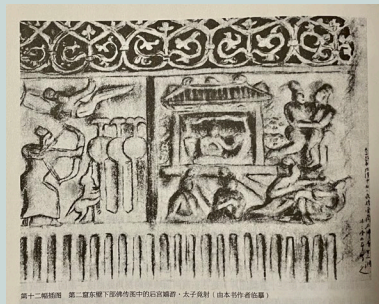


第十三幅挿図 佛龕洞入口后面的花纹 (由本书作者临摹)



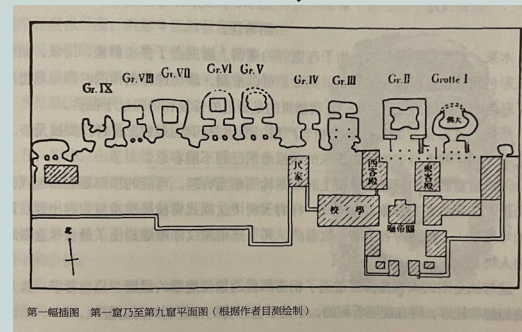
第五幅挿図 第一窟の佛像其二 (由本书作者临摹)
左手手掌在左肩处张开, 右手轻放在左着一匹马。这座像位于佛龕里面, 佛龕

第六幅挿図 第二窟的佛像 (由本书作者临摹)

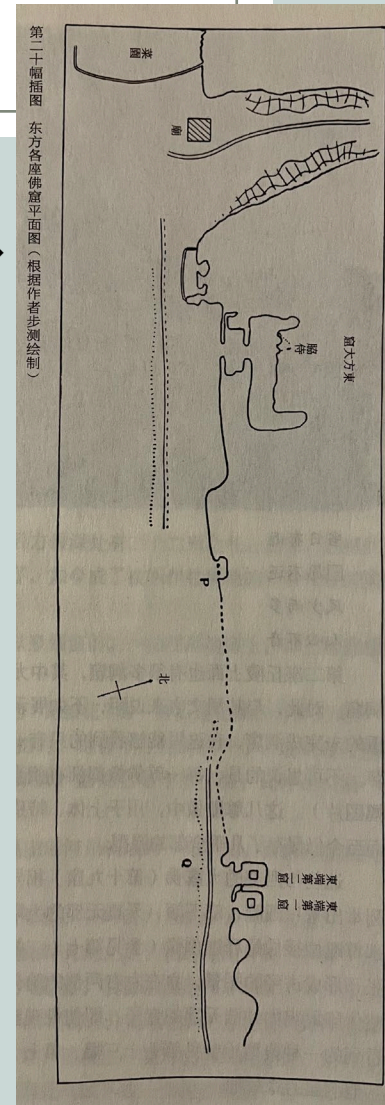


← 模写とスケッチ

目測による
平面図



第一幅挿図 第一窟乃至第九窟平面図 (根据作者目测绘制)

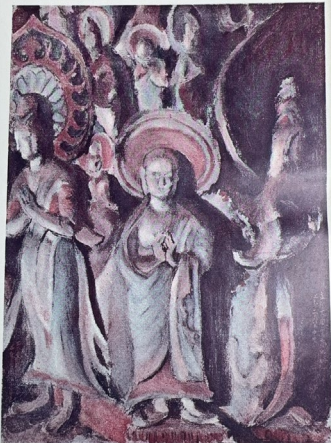


第二十幅挿図 东方各座佛窟平面図 (根据作者步测绘制)

三、木下杢太郎『大同石佛寺』の構成と特質

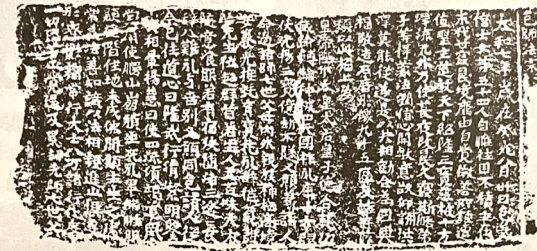


- 写真家・山本讃七郎撮影の石仏寺写真30点
- 肉筆ののスケッチ、平面図
- 洞窟内で自ら取った拓本



第一の窟内彫刻合部上段西側第二龕
(実八木村八 油画)

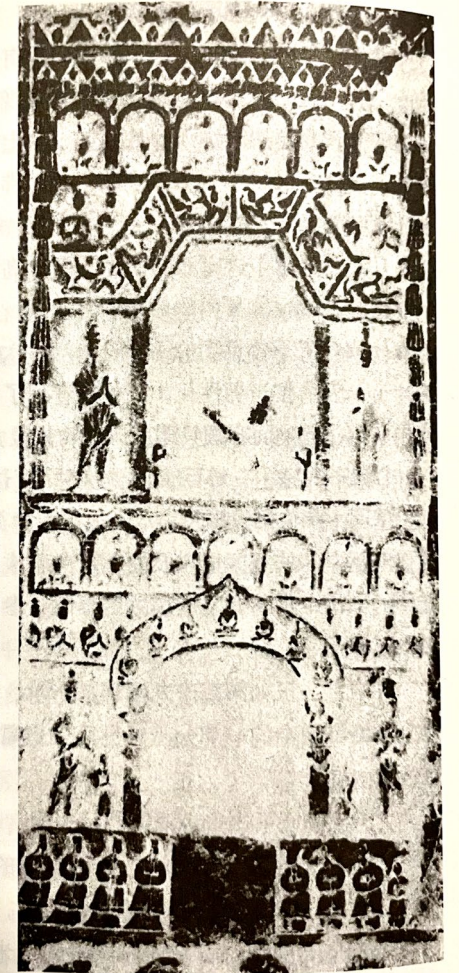
1922年版挿図
木村庄八油画



第三十二幅插图 第七窟东壁碑文拓本



第三十三幅插图 第七窟内部拓本（由本书作者拓制）



第二十八幅插图 西方第十七窟东壁的拓本（由本书作者拓制）

三、木下杢太郎『大同石佛寺』の構成と特質

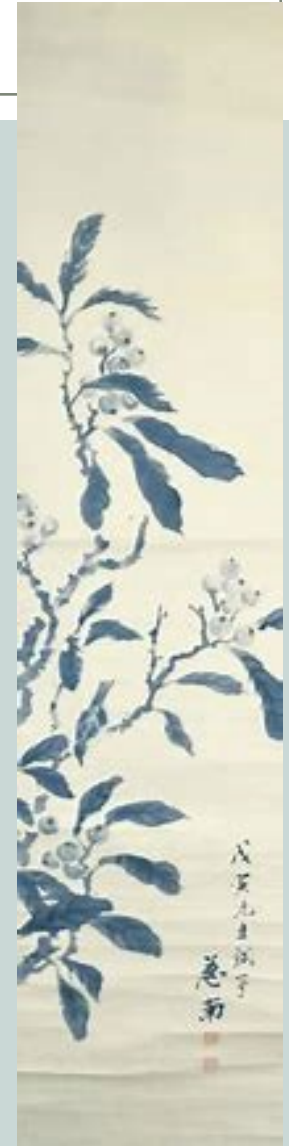


- 写真家・山本讃七郎撮影の石仏寺写真30点
- 肉筆のスケッチ、平面図
- 洞窟内で自ら取った拓本
- 人情風物の描写
 - 害虫や寒さ
 - 厳しい環境や旅の苦勞
 - 河川や城壁、夕日と灯籠、驢馬や羊の群
 - 旅館の人々、どもたち、親切な農家

→ → 主流とは言えない視点



木下
雲岡



木下
枇杷図



- 19世紀末から20世紀初頭
 - 中国は清朝の末期から中華民国への歴史的な転換期。
 - 日本では日中関係や日本人の中国観，西洋観に大きな変化が生じていた。
- 第一次世界大戦
 - 欧州は戦争の影響で中国には手が回らず。
 - 日米は中国での勢力拡大を加速させた。



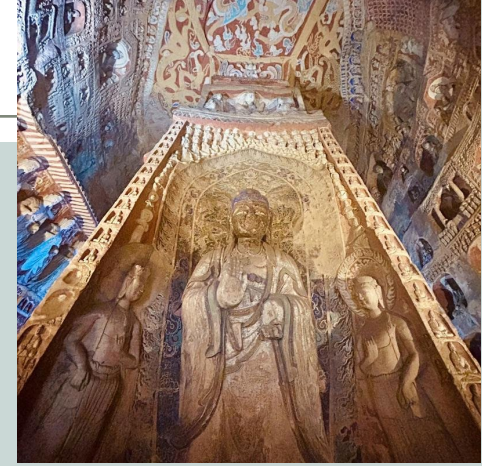
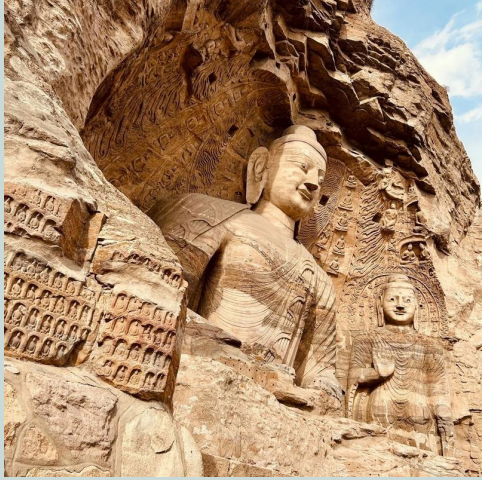
三、木下杢太郎『大同石佛寺』の構成と特質



- 『大同石佛寺』の独自性
 - 文字描写、文献検証、写真写生、内壁拓本などを統合した実録
 - 客観的かつ情感豊かな旅行記
- 木下杢太郎
 - 医者として実際の状況を記録することを重要視する
 - 文学者として文字描写の力を理解する
 - 美術史家として図像保存の重要性を深く考える



三、木下杢太郎『大同石佛寺』の構成と特質



『大同石佛寺』を他の旅行記とは異なり、日本の美術界と仏教研究分野で大きな反響を呼び、多くの日本の読者に雲崗石窟が持つ輝きと神秘性を初めて伝えた。また、中国について政治的な目論見を持つのではなく、審美的な観点からの観察を通じた独自のスタイルで捉えていた。



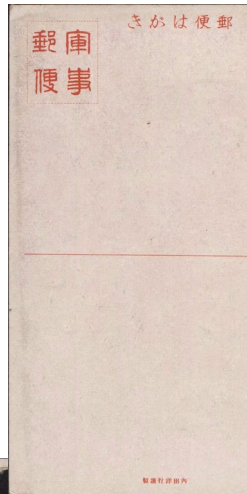
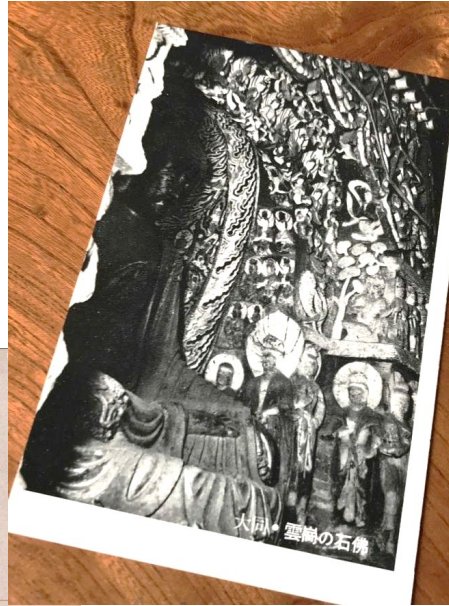
雲崗石窟

三、木下杢太郎『大同石佛寺』の構成と特質

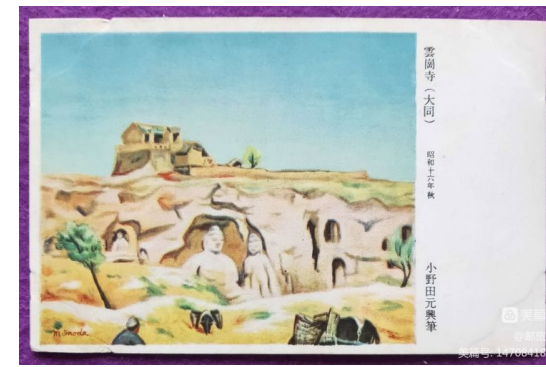


- 1921年9月14日—「毎日沐浴するとか毎晩衣服を更めるとか云ふやうな習慣をば脱却して」, 「人間世界の諸欲望を忘却して暮らしてみます」, 「恐らくはわたくしの生活に於て, 最も好く, 最も幸福な時であるだろうと感ぜられます」, 「この幸福な心持が貴君にも乗り移るやうに」と述べている。
- 1938年11月6日—「三上次男氏の『張家口から雲崗へ』の紀行を読むと, 雲崗には支那の兵營や病棟が出来て居り, また石窟古寺に隣して舊山西軍の騎兵司令の別墅も建てられたさうです」
- 『大同石佛寺・跋』の最後—「いくら書いても書き榮がしませんから, 之れでいよいよ筆を擱くことにします」

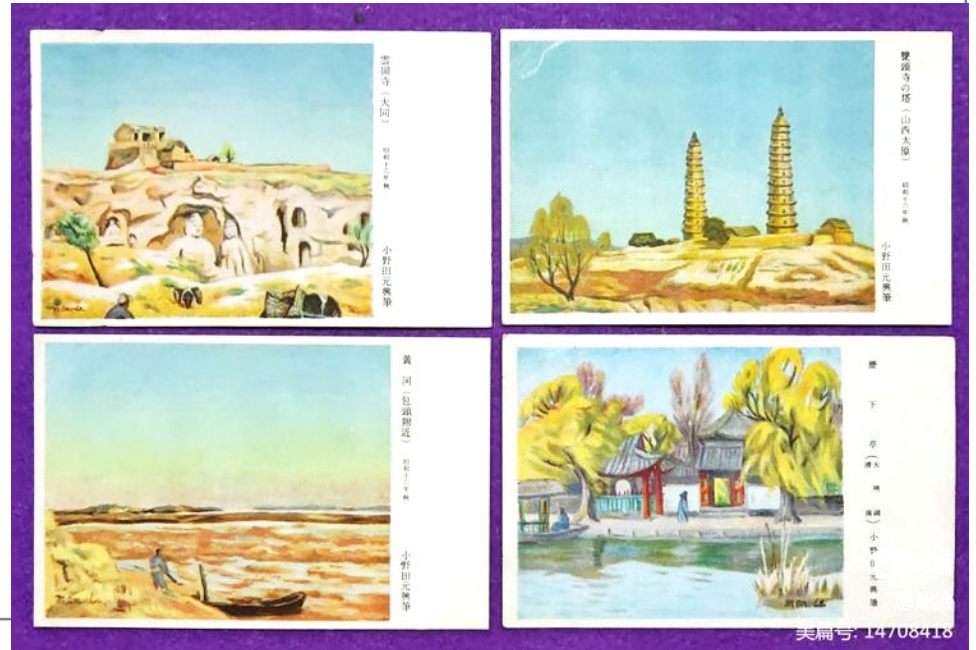
満鉄発行の絵葉書
《大同雲崗の石佛》



軍事関連の
絵葉書

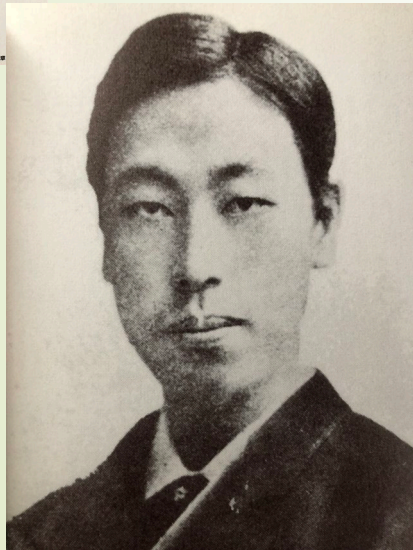


軍事絵葉書
《雲崗寺》 《双塔寺之塔》
《黄河》 《歴下亭》



美編号: 14708418

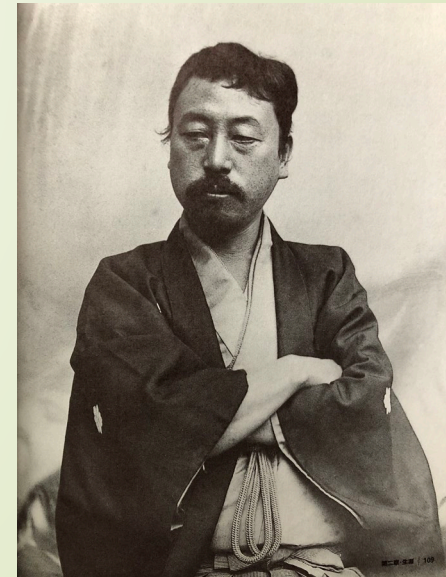
四 終わりに一岡倉天心との関連



日本近代における中国仏教美術研究の起点において、岡倉天心は疑いなくきわめて重要な人物である。東京美術学校の精神的指導者であった天心は、日本で初めて近代的学問分野としての「美術史」教育を開始し、その「日本美術史」の講義内容には中国美術史が大きな比重を占めていた。

四 終わりに一岡倉天心との関連

- ➡ 『日本美術史』における中国美術論
 - 第一に、中国美術が日本美術に及ぼした影響をきわめて強調している。
 - 第二に、最も早期の独立した中国美術史の系譜を描き出している。
 - 第三に、中国各地の文化に見られる諸要素は唐代において統合されたと捉えている。



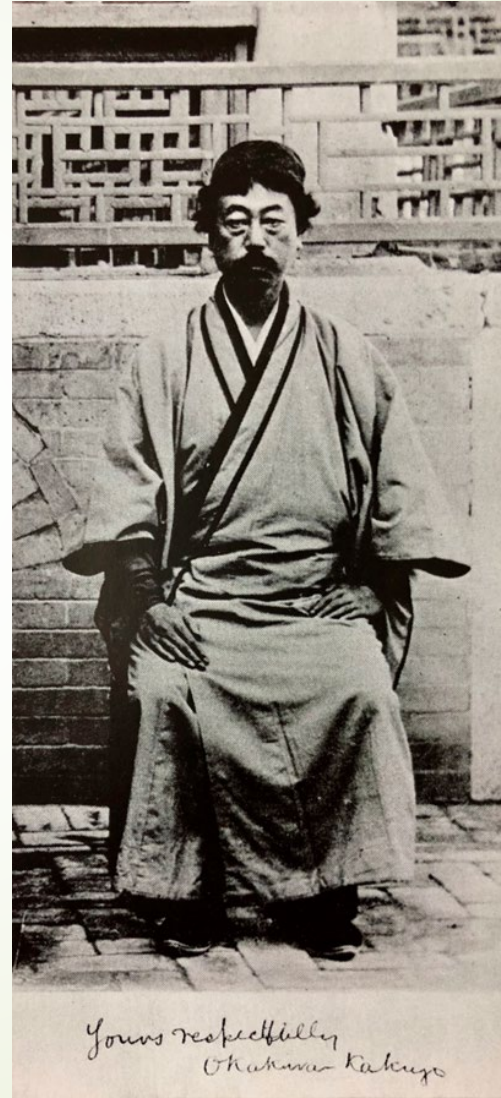
四 終わりに一岡倉天心との関連

➡ 天心の中国美術、「中国」対する認識の変化

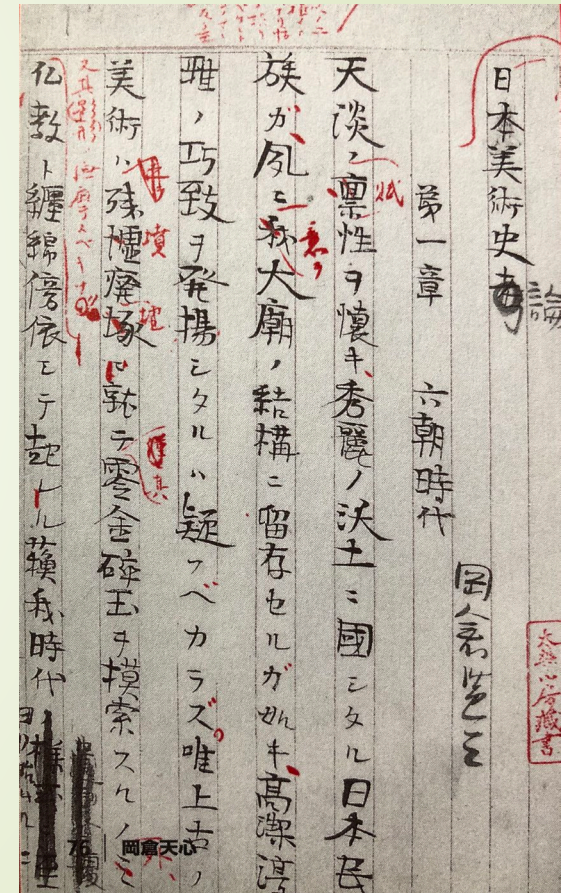
- 第一に、「日本美術独立論」
- 第二に、「中国において、中国は存在しない」
- 第三に、「南北中国論」

天心の中国認識が明確な自己修正の過程にあり、そこに一定の内的緊張を伴っていた

天心は北京白雲觀にて



『日本美術史論』
手書き原稿





➔ 1893年7-12月天心の初の中国旅行

- 初めて直接的かつ強烈な感性的経験を得る
- 龍門石窟との出会い
- 写真、幻灯、講演、調査報告を通じて西洋学界に紹介



シャヴァンヌ
(Edouard
Chavannes)

天心は河南省
开封にて



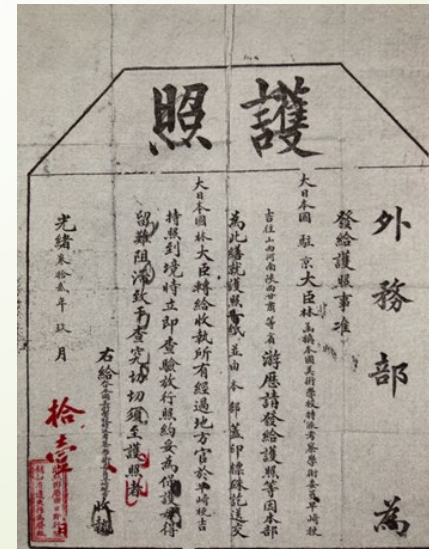
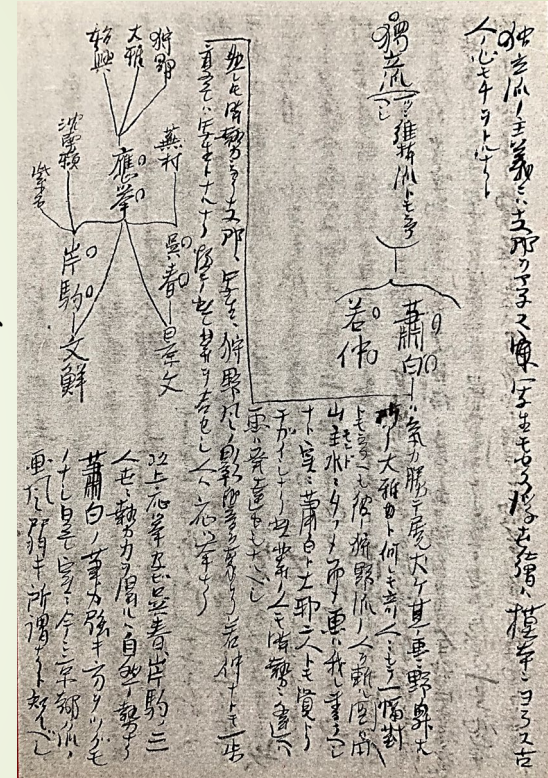
東京美術学校の
卒業証



四 終わりに一岡倉天心との関連

- ➡ 1893年7-12月天心の初の中国旅行
- ➡ 明治期日本における民族国家形成の歴史的文脈
- ➡ 制度内部に位置する官僚型知識人
 - 日本の伝統を遡及的に再構築し、西洋中心主義に対抗するため
 - 「美術史」という形式を通じて民族的自信と文化的アイデンティティを構築するため

“東洋美術史” ノート
(高橋勇)



清国政府が日本外務省に発給した旅券

四 終わりに一岡倉天心との関連

- ▶ 1904年ボストン美術館赴任
収集の重点を中国美術へと移行
中国仏教美術や絵画を西洋の博物館へと導入
- ▶ 岡倉天心は、日本とアジア、東洋と西洋という多重の緊張関係の中で、「東洋精神」に基づく東洋美術観を核心とする中国仏教美術認識の枠組みを形成し、実地調査と美術史的記述を通じて、龍門石窟などを近代的知の体系へと位置づけたのである。この思想的枠組みは、20世紀以降も断絶することなく、次世代の知識人によって継承され、発展されていった。



天心の愛用した茶道具



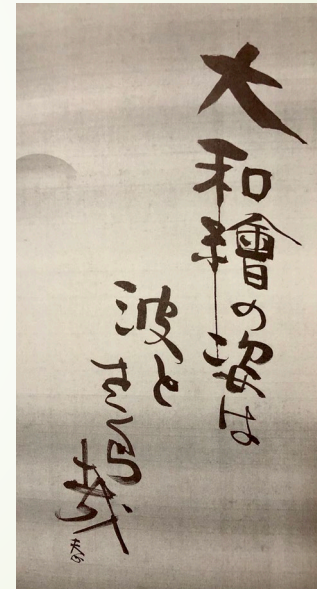
天心
「竹図」

四 終わりに一岡倉天心との関連

- ▶ 木下は、その代表的な存在で、この「東洋美術」の文脈の中で思考を展開した人物。天心の没時、木下は医学から文学・美術評論へと転身する重要時期



天心「海邊の松」

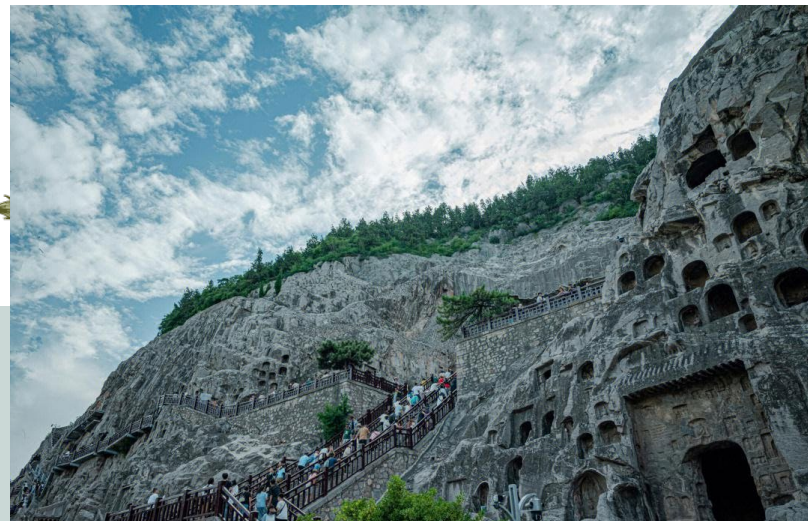


天心「ロバと人物」局部



四 終わりに一岡倉天心との関連

- 「近代世界秩序の中で中国仏教美術の精神的価値をいかに理解するか」を継承した
- 文学者の感性と言語をもって石窟に向き合い、研究の重心を制度や歴史叙述から、視覚経験と審美的表現へと移した



龍門石窟

四 終わりに一岡倉天心との関連



- 旅行記 (travelog) は「異域」や「他者」への理解を探求する文化的な表現であり、「自我民族誌」(autoethnography) の特性も持っている。国内での民族意識の構築や、外部の政治的、経済的手段としても機能する
- 木下の旅行記は、自己を拡張する手段としてではなく、むしろ異国での自国を省察する一種の自己反省の記録である。
- 『大同石佛寺』は木下独自の特色を持ち、文学的、感悟的であり、美学的、宗教的であり、さらに自然科学と人文科学を融合させたものであった。



木下杢太郎記念館



木下杢太郎文学碑





日本における雲崗石窟に関する研究の変遷は、近代日中関係の一端を映し出すものである。木下杢太郎は、雲崗石窟をアジア文明の結晶物と評価した男であり、『大同石佛寺』では、雲岡石窟が単なる仏教遺跡としてではなく、時代を超えてなお生き続ける精神的表現として描き出されている。



雲崗石窟





谢谢

ご清聴ありがとうございました